

小中の現場実態を 理解してほしいのです

(二面より)

教育長さんは、ご経歴で進学高校の管理職を長くされてきたと伺っています。その分、様々な困難を抱えている小学校・中学校の実態についてはあまりご存じではないのではありませんか。そう感じるのには、ここ数年の委員会からの教育施策の指示があまりにも唐突だったり、今まで学校に定着していた基本的な教育活動を反故にしてまでも新しい施策をほめ込んだりすることから、これを感じるので。

さらに、校長先生や教頭先生が承知していない事情がメールによって保護者に先に伝わったり、

委員会の指示として突然文書が送られたりするところもしばしばです。現場が上位下達の施策に振り回されています。また、施策の内容も、学校の中の教育活動のバ

新しい施策は「働き方改革」と矛盾しませんか

最後に、このかなり無理のある施策で生じるであろう現場との乖離を埋めるために、「エバンジェリスト」の役割は大変大きいと予想されますが、多くの職場は使命感にみ

なざった若い教師が選ばれたいと思います。しかし、この施策の推進役も担当することになった時、現場に

無理を強いることで、あらゆる不満や対立が生じることを危惧します。

また、当然事前研修のための出張や伝達のための準備・研究で本人の時間が割かれ、学級や担当校務分掌に支障をきたすことも懸念されます。それでも、「賞味期限切れ教師」たちは、このような場面でもこの方たちの学級支援や準備の協力は惜みず、力になってくれるはず。それは、職場の人間関係を円満にし、それが子どもたちの教育活動を支えることにつながることから、力になるのです。逆に、納得のいかない施策のため生じた矛盾に対して心から支える気持ちが生まれてくる



タブレット収納庫は何故か重い上扉で子どもの力では開けられません

ランスを欠いた、突出したものが多く、現場は混乱しています。その勢いで、今後新しい「パラダイムシフト」的な施策が下ろされるのかと思うと、不安と恐ろしさしか感じません。

どうかステップを見直し、現場に無理のない、子どもたちの実態に適った導入をお願いします。

のか、これも大きな不安の種類です。

さらに、研究所長は実施にあたって、「1・2月ごろ、一度にたくさん納入される端末の準備をお願いします」としたり、「新しい校務分掌の設置」「すべての教職員に、体系的な研修体制を構築していく」と説明しました。教育委員会が今年度

強く訴えた、業務削減を念頭に「働き方改革」と矛盾しています。説明していただきたいです。

私たちは、授業におけるICTの活用、コンテンツの利用を否定しているわけではありません。現に、授業の中でTVに教材を提示したり、教科書の補足として学習コンテンツや動画の提示を取

り入れたりして、効果を上げている場面もあります。また、この度のコロナ禍において、双方向のリモート学習についても必要性を感じています。

しかし、GIGAスクール構想、とりわけ「さいたまモデル」は、国の施策以上の内容であり、さいたま市の子どもたちがここでも実験台にさらさ

れて、必要以上の学習を強いられることはないでしょうか。先進国においては、過度なICTの導入は逆効果であるとの報告も聞いています。

改めてお願いします。どうかステップの見直しを図り、現場に無理のない、子どもたちの実態に適った導入をお願いします。 敬具

改善すべきALIT等の生活と試験の不安

12月が近づく毎年のALITは大きなプレッシャーの中で過ごしています。さいたま市が関東圏でも数少ない、1年更新でALIT試験を行っている自治体だからです。

試験は筆記と面接があり、毎年12月中旬(今年度は18日、以前は23日頃)に行われます。言う

に及ばずクリスマスは宗教的にも大切な行事で、ALITの中にもたくさんの方のクリスチャンがいます。ようやく2学期の授業を終えても、その多くは試験のために家族の待つ故郷に帰ることができません。

さいたま市の可否発表は、あまりにも遅い2月。もし不合格だった場合、たった2か月で4月から勤め先を見つけないければなりません。もちろんこの時期に他県・他市のALIT求人などあるはずもありません。特に単身で働くALITの状況は切

実で、就労証明がなければ日本に住めなくなってしまう。ALITの中には「本当はさいたま市はこの仕事を続けたいけれど」と悩みながら他県を受験する人や、さいたま市の結果を待つからでは先方に迷惑が及ぶからと受験そのものをあきらめるケースもあるとい

います。生活への不安から、ALITの仕事の傍ら常に職探しをしている人もいます。また、日本で家庭をもち長年経験を積んでいるALITであつても、家族を支え日々の授業と両立しながら行う試

験勉強は年を重ねることに大変になるといいます。どんなに情熱があり優れた仕事をしている人であっても、毎年試験に合格し続けることは時間的にも精神的にも容易なことではありません。

先の見えない不安と毎年行われる試験への重圧は、英語講師や臨任の先生方など、日々の学校を支える多くの方が抱える問題です。今年もさいたま市教組では、労働条件や雇用に関わる問題の改善を強く求めています。

